

一般国道160号氷見バイパス  
埋蔵文化財試掘調査報告 I

1990年3月

氷見市教育委員会

一般国道160号氷見バイパス  
埋蔵文化財試掘調査報告 I

1990年3月

氷見市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、一般国道160号水見バイパス建設工事に先立つ埋蔵文化財試掘調査のうち、平成元年度におこなった、富山県水見市阿尾島尾所在の、阿尾島尾A遺跡・阿尾島尾B遺跡の報告である。
2. 調査は、建設省北陸地方建設局富山工事事務所の委託を受けて、水見市教育委員会がおこなった。
3. 調査事務局は、水見市教育委員会社会教育課に置き、課長代理島 勝彦・主任余川一枝・主事浦 勇仁が調査事務を担当し、課長渡邊憲一が総括した。
4. 調査は、水見市立博物館学芸員(社会教育課兼務) 大野 実が担当した。
5. 本書の編集・執筆は、大野が担当した。
6. 出土遺物は、水見市立博物館が保管している。
7. 調査および本書の作成にあたって、以下の方々や機関から協力を受けた。記して感謝申し上げる(順不同・敬称略)。

湊 晟・橋本芳雄(水見市文化財審議委員)、鈴木瑞治・小境卓治(水見市立博物館)、富山県埋蔵文化財センター、建設省富山工事事務所

上合幸作・大沢はつえ・山本芳枝・二崎きみ・鳴 峰子・沢井とき(地元)、水見工業㈱

目　　次			
	第 6 図 試掘調査区	10	
第 1 章 調査に至る経緯	1	第 7 図 遺跡とその周辺	13
第 2 章 遺跡の環境	5	表 目 次	
第 1 節 遺跡の地理的環境	5	第 1 表 調査対象遺跡一覧	2
第 2 節 遺跡の歴史的環境	5	写 真 目 次	
第 3 章 阿尾島尾 A 遺跡	9	写 真 1 調査区域航空写真 (1)	
第 1 節 調査の概要	9	写 真 2 調査区域航空写真 (2)	
第 2 節 層位	9	写 真 3 阿尾島尾 A 遺跡	
第 3 節 遺物	9	写 真 4 阿尾島尾 B 遺跡	
第 4 章 阿尾島尾 B 遺跡	9	写 真 5 調査風景	
第 1 節 調査の概要	9	写 真 6 調査風景	
第 2 節 層位	9	写 真 7 調査風景	
第 3 節 遺物	10	写 真 8 出土遺物 (1)	
第 5 章 まとめ	10	写 真 9 出土遺物 (2)	
挿 図 目 次		写 真 10 出土遺物 (3)	
第 1 図 調査対象遺跡	3	写 真 11 出土遺物 (4)	
第 2 図 園場整備前の阿尾島尾 A 遺跡		写 真 12 出土遺物 (5)	
阿尾島尾 B 遺跡	6	写 真 13 出土遺物 (6)	
第 3 図 周辺の遺跡	7	写 真 14 出土遺物 (7)	
第 4 図 阿尾島尾 A 遺跡層位模式図	9	写 真 15 出土遺物 (8)	
第 5 図 阿尾島尾 B 遺跡層位模式図	10	写 真 16 出土遺物 (9)	

## 第1章 調査に至る経緯

海岸線をほぼ沿うようにして、水見市を南北に縦断する一般国道160号は、水見市にとって経済・観光上重要なルートである。しかしながら、従来の路線は2車線で幅が狭く、増加する交通量に対処できなくなってきたため、新たなバイパス路線の建設が計画された。

水見バイパス（4車線）は現在水見市稻積まで一部暫定2車線で供用が開始されているが、残りの稻積～藪田間の予定路線内に、周知の遺跡が含まれており、埋蔵文化財の保護について開発側との調整が必要となった。

昭和58年発行の「水見市遺跡地図」では、バイパス予定路線内に3ヶ所の遺跡が含まれている。水見市教育委員会では事業地周辺の埋蔵文化財の状況を、より正確に把握するために、昭和61年度と昭和63年度に、路線を中心とした埋蔵文化財分布調査をおこなった。

### 昭和61年度

対象地区：稲積地内

調査期間：昭和61年7月16・17日（2日間）

調査担当：岡本泰一（水見市立博物館学芸員・社会教育課兼務）

### 昭和63年度

対象地区：阿尾・藪田地内

調査期間：平成元年2月7・8・14・15日（4日間）

調査担当：大野 究（水見市立博物館学芸員・社会教育課兼務）

この結果、従来の3遺跡に加えて、新たに3ヶ所の遺跡を発見した。また近接の1遺跡の範囲が予定路線内に広がると推測した（第1図・第1表）。

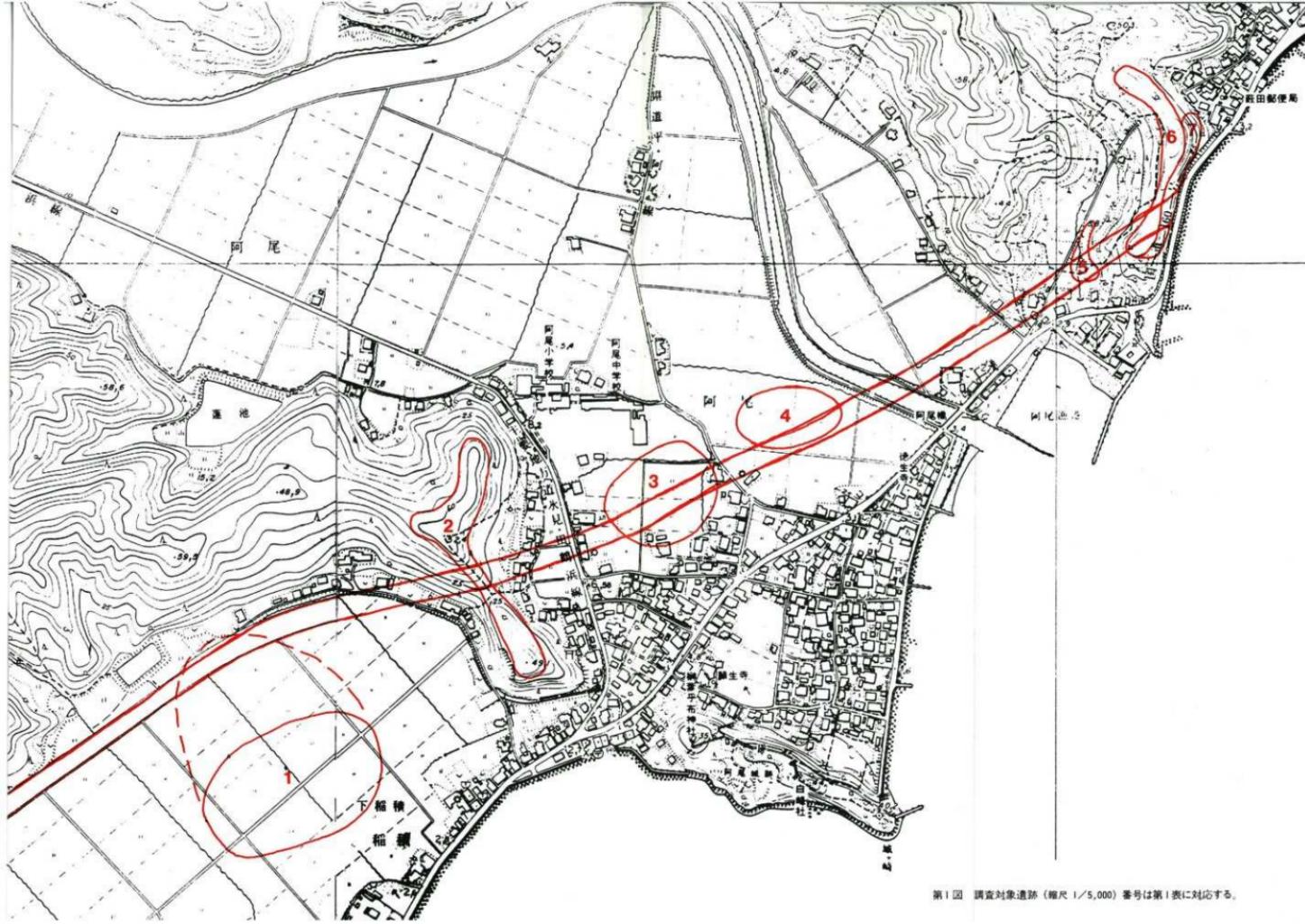
これを受けて、建設省と市教育委員会とで協議した結果、7ヶ所の遺跡のうち、まず用地買収のほぼ終了した、阿尾島尾A遺跡・阿尾島尾B遺跡の2遺跡について、平成元年度中に試掘調査をおこない、遺跡の範囲・状態等を確認することになった。

試掘調査は、平成元年12月12日～同21日の延べ8日間、機械と人力によりおこなった。

番号	遺 路 名	遺 物・遺 構	備 考
1	阿尾島山 A 遺跡	土器（縄文・土師器・須恵器・珠洲）	市遺跡地図番号88。遺跡の範囲がバイパス予定路線内に広がると推測する。山裾で過去に縄文土器が採集されたという。 <sup>注</sup>
2	△ 三角山城跡	平坦地・堀切	市遺跡地図番号26。城跡伝承地であったが、人為的な削平のあることを確認。北側に延びる尾根は、古墳である可能性もある。
3	阿尾島尾 A 遺跡	土器（縄文・土師器・須恵器・珠洲・近世陶磁器）	新発見の遺跡。
4	△ 阿尾島尾 B 遺跡	土器（縄文・土師器・須恵器・珠洲）	新発見の遺跡。
5	△ 阿尾瀬戸ヶ谷内遺跡	土器（縄文・土師器・近世陶磁器）	新発見の遺跡。
6	△ 山崎城跡	平坦地・堀切	市遺跡地図番号89。「越登賀三洲志 故墟考」にみえる「山崎城」と思われる。
7	△ 阿尾瀬戸ヶ谷内横穴群		市遺跡地図番号22。現在断崖に落石防止ネットが被されており、確認できない。

註　　濱　農氏のご教示。

第1表　調査対象道路一覧（番号は第1図に対応する）



第1図 調査対象遺跡 (縮尺 1/5,000) 番号は第1表に対応する。

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の地理的環境

水見市は富山県の北西部に位置し、能登半島の基部東側にある。市域は、市の南西方面にそびえる標高637mの宝達山を起点として、北東方向にのびる宝達丘陵と、東方向にのびる二上丘陵の、二つの丘陵にとり囲まれた一帯である。宝達丘陵は、水見市と石川県との境界線をなしながら石動山に至り、これより石動山丘陵となって崎山半島を走り、海岸線に達している。一方二上丘陵は、水見市と西礪波郡福岡町・高岡市との境界線をなして、次第に低くなりながら海老坂峠に達し、ここからは標高が高くなり、二上山ブロックとなって、その先端は海岸に急斜している。水見市は、これらの丘陵から派出する小丘陵により、西条・十一谷・上庄谷・余川谷・八代谷・灘浦の6つの区域に分けられている。また市の東側は富山湾に面し、約20kmの海岸線の、北半分は断崖、南半分は砂丘である。

試掘調査をおこなった阿尾島尾A遺跡・阿尾島尾B遺跡は、八代谷を流れる阿尾川の下流右岸に所在し、海岸線から約300mの地点に位置する。阿尾川は石動山西側の荒山峠近くに発し、約11kmで富山湾に注ぐ、水見市の主要河川のひとつである。

両遺跡の南東には、阿尾城山と呼ばれる標高40m前後の独立丘陵が海に向しており、この丘陵は新第三紀鮮新世水見累層截田シルト層である。また、ここから国道160号をはさんで八代谷と余川谷の境をなす丘陵がのびており、この丘陵は截田シルト層下位の泥岩層から成っている。阿尾島尾A遺跡はこの丘陵に近い沖積地に、阿尾島尾B遺跡は阿尾川の氾濫源の低位沖積地に所在する。さらに阿尾川下流の平野では、近年温泉が噴出しており、観光資源として注目されている。

阿尾島尾A遺跡は標高約5mを測り、現在は宅地・水田として利用されている。阿尾島尾B遺跡は標高約3mを測り、現在は水田として利用されている。

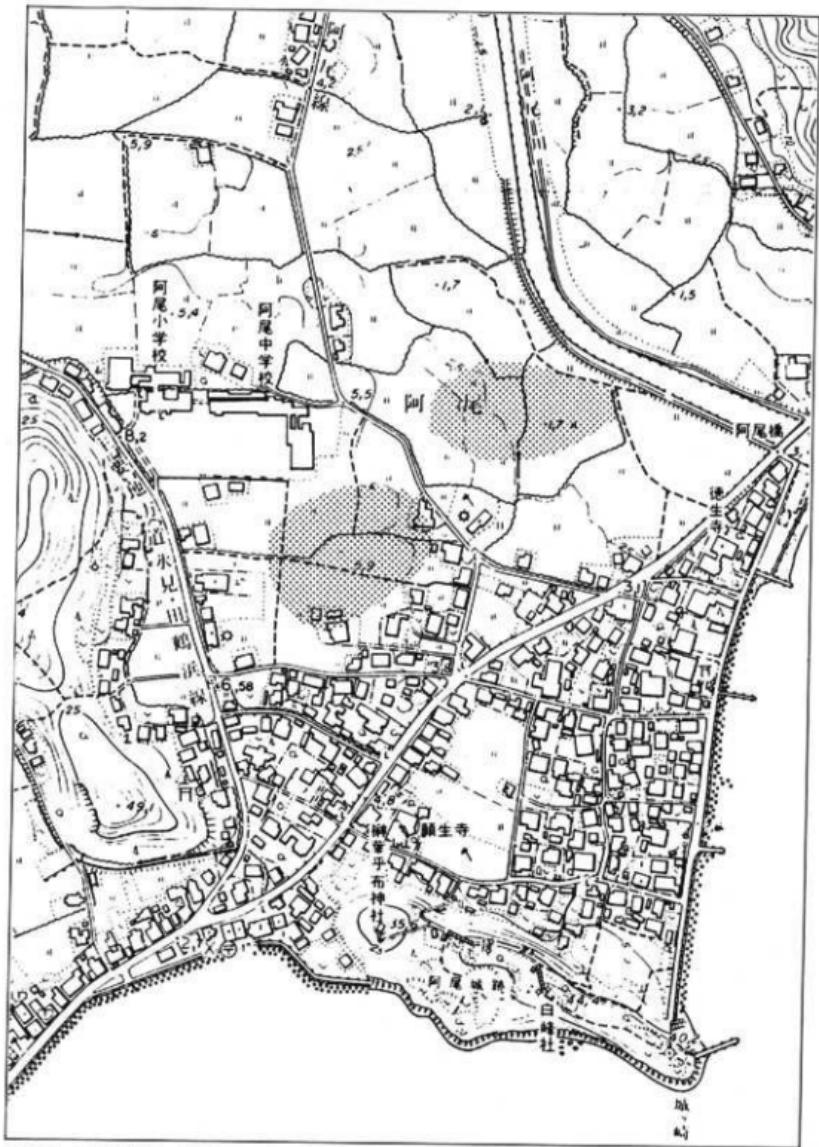
### 第2節 遺跡の歴史的環境

水見市の旧石器時代の遺跡は、今のところ未確認である。縄文時代でまず注目できるのは、阿尾川河口から海岸線を約2km北に行った泊洞穴出土人骨であり、この26歳前半の男性は縄文時代早・前期と推定されている<sup>1</sup>。また、阿尾川の南を流れる余川川の河口から、約2km上流に所在する縮積後池遺跡では、縄文時代前期前葉の土器片が採集されている<sup>2</sup>。

しかし、阿尾地区ではわずかに上器片が散布するものの、縄文時代の様相は不明である。

次に弥生時代終末期から古墳時代初めにかけて、水見市では遺跡が増加するが、阿尾地区でも阿尾城跡から月影期の土器が出土している<sup>3</sup>ほか、城跡北側の畑地からも該期の土器が採集されている<sup>4</sup>。

古墳時代に入ると、阿尾川河口から約2kmの丘陵に、13基以上と推測する指崎向山古墳群が築造される。このうち径約16mの円墳である13号墳が昭和21年に発掘され、直刀1・碧玉製管



第2図 地図整備前の阿尾島尾A遺跡・阿尾島尾B遺跡（縮尺 1/5,000）

- 1 沿洞穴（縄文）
- 2 稲田遺跡（縄文～奈良・平安）
- 3 稲田聚落堆穴群・中世墓（古墳・中世）
- 4 八代城跡（中世）
- 5 指崎五反田遺跡（奈良・平安）
- 6 指崎舞訪野遺跡（中世）
- 7 指崎前山古墳群（古墳）
- 8 海老瀬城跡（中世）
- 9 阿尾瀬戸ヶ谷内横穴群（古墳）
- 10 山崎城跡（中世）
- 11 阿尾瀬戸ヶ谷内遺跡（縄文・中世・近世）
- 12 阿尾島尾B遺跡（縄文・古代・近世）
- 13 阿尾島尾A遺跡（縄文・古代・中世・近世）
- 14 三角山城跡（中世）
- 15 阿尾遺跡（弥生末～古墳初）
- 16 阿尾城山横穴群（古墳）
- 17 阿尾城跡（弥生末～古墳初・中世）
- 18 阿尾島田A遺跡（縄文・古代・中世）
- 19 阿尾島田B遺跡（中世）
- 20 城ヶ峯（城跡伝承地）
- 21 稲耕西ヶ谷内遺跡（古墳・古代）
- 22 稲耕後池遺跡（縄文・古代）
- 23 余川舞ヶ谷内遺跡（奈良・平安）
- 24 稲耕前田遺跡（縄文・古墳・古代）

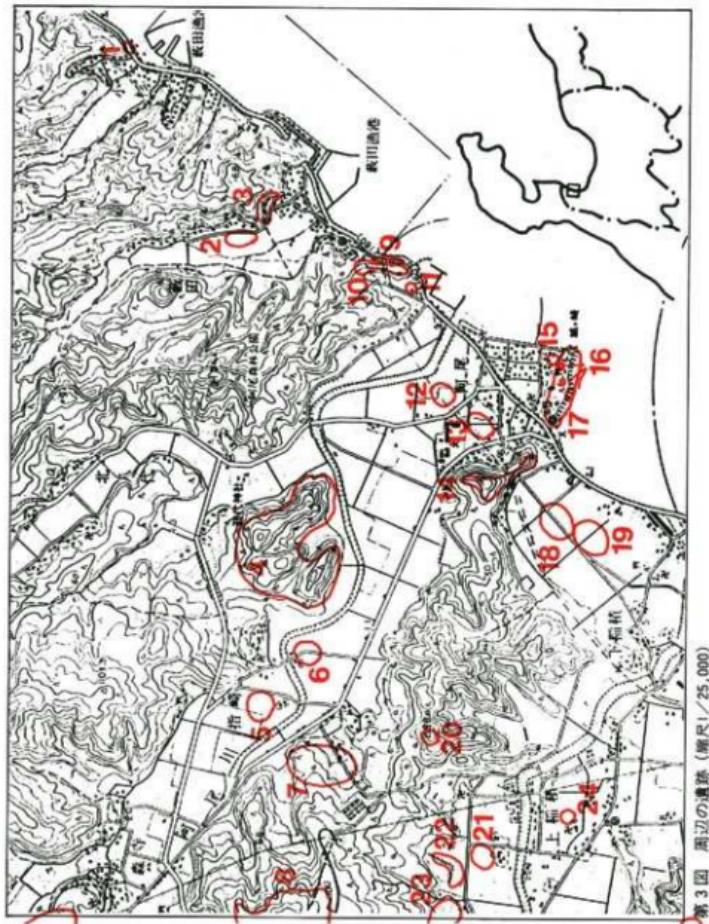


図3 図 周辺の遺跡 (縮尺1/25,000)

玉9・須恵器壺1・須恵器壺破片約10が出土し、腰床・木棺の埋葬施設が確認されている<sup>5</sup>。時期は6世紀中葉であろう。

6世紀後半から7世紀にかけては、阿尾城山横穴群・阿尾瀬戸ヶ谷内横穴群が営まれる。いずれも断崖に所在するため詳細不明であるが、前者からは金環・鉄鋤刃部・刀子・須恵器提瓶・同壺が出土している<sup>6</sup>。

古代の阿尾地区については、阿尾島田A遺跡から昭和49年の調査で須恵器・土師器が出土しているほかは、従来不明であったが、今回のバイパス関係の調査で縄文についたといえよう。なお阿尾地区北側の八代地区には、延喜式内社の箭代神社が鎮座する。

中世の阿尾は、いくつかの城・砦が築かれ、たびたび戦乱の舞台となっている。これは阿尾地区が、海沿いに能登へ抜ける街道と、山伝いに荒山峠をこえて能登へ抜ける街道の分岐点にあたり、軍事・経済上の重要な拠点であったからであろう。県指定史跡として著名な阿尾城跡をはじめ、山崎城跡・八代城跡・三角山砦跡が、阿尾川下流の平野をとり開むように所在している。ただしこのうち時期のはっきりするのは、16世紀後半頃の遺物を最も多く出土した阿尾城跡だけであり、他の城跡は不明である。文献資料では阿尾城と山崎城が戦国期、八代城と三角山砦が南北朝期と記録されている。

また阿尾島田B遺跡・指崎漱訪野遺跡から中世の遺物が出土しているほか、阿尾川改修工事の折に数個の糸印が出土したという<sup>8</sup>。

## 註

- 1 小片 保・加藤克知・六反田篤「富山県水見市泊洞穴から出土した人骨の形質について」『人類学雑誌』97号、1989年。
- 2 大野 実「余川川流域の遺跡資料」『水見市立博物館年報』第8号、1990年。
- 3 水見市教育委員会が平成元年度に試掘調査。未報告。
- 4 水見高校歴史クラブ「富山県水見地方考古学遺跡と遺物」1964年。
- 5 註4文献。
- 6 註4文献。
- 7 註3と同じ。
- 8 水見市史編修委員会『水見市史』1963年、727~728ページ。

## 参考文献

- 水見市史編修委員会『水見市史』1963年  
水見市立博物館・水見市教育委員会『水見市遺跡地図』1983年  
水見高校歴史クラブ『故郷の城址』1961年  
高岡 徹・久保尚文「富山県」「日本城郭大系」第7巻 1980年

## 第3章 阿尾島尾A遺跡

### 第1節 調査の概要

試掘調査は、バイパス予定路線の約 5,600m<sup>2</sup>を対象に、幅 2 m のトレンチを現地の地形に応じて、4 ~ 30 m の長さで 22ヶ所設け、機械と人力で発掘をおこなった。発掘面積は合わせて約 800m<sup>2</sup>である。

また対象とする深さは、地山までとしたが、遺構を確認した地点では、遺構上面までとし、遺構の発掘はおこなわなかった。さらに地山層の確認のため、遺構のない地点で随時地下約 4 m まで掘り下げた。

### 第2節 層位

調査区の層位は、第1層が 10 ~ 20 cm の黒色表土(耕作土)、第2層が 30 ~ 45 cm の暗褐色粘質土であり、第3層が黄褐色砂質土、第4層が青色粘土地山である。

遺跡一帯は圃場整備の時に上部を削られており、第2層が遺物包含層である。遺構は第3層上面で溝と穴が確認できた。なお第3層は所々で途切れるが、これは圃場整備以前の遺跡中央に、溝が流れていたためと思われる。

### 第3節 遺物

出土した遺物は、縄文時代の土器・定角式磨製石斧、古代の須恵器杯A・杯B・杯A蓋・杯B蓋・横瓶・瓶・甕など、古代の土師器杯・甕など、中世の珠洲壺・甕・鉢、近世の越中瀬戸・伊万里系磁器、その他の陶磁器、時期不明の土鍬であり、整理箱13箱分である。

これらの遺物のうち、最も量の多いのは古代須恵器である。時期的には7世紀末から9世紀のものであるが、大半は8世紀代のものである。

遺物は設定した全トレンチから出土しているが、概していえば調査区の西側からの出土が多い。一方遺構は調査区のはば全域で確認している。したがって遺跡は当初の予想どおり、長さ約130mの範囲で、バイパス路線と重なっていると考えられる。

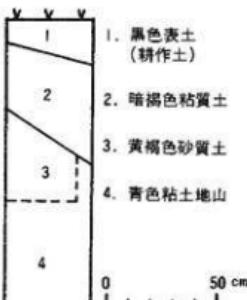
## 第4章 阿尾島尾B遺跡

### 第1節 調査の概要

試掘調査は、バイパス予定路線の約 3,300m<sup>2</sup>を対象に、幅 2 m のトレンチを現地の地形に応じて、4 ~ 10 m の長さで 14ヶ所設け、機械と人力で地下約 4 m まで発掘をおこなった。発掘面積は合わせて約 210m<sup>2</sup>である。

### 第2節 層位

調査区の層位は、第1層が 15 ~ 30 cm の暗褐色表土(耕作土)、第2層が 40 ~ 50 cm 黄褐色粘質



第4回  
阿尾島尾A遺跡層位模式図

土であり、第3層が40~60cmの礫混じり青色粘土、第4層が礫混じり暗青色粘土地山である。

調査の結果、造構は確認できず、第3・4層から小量の遺物が出土した。

### 第3節 遺物

出土した遺物は、縄文土器、土師器、古代須恵器甕、中世珠洲壺、甕、近世伊万里系磁器であり、整理箱1箱弱である。

遺物はいずれも小破片であり、ほとんどのものが摩滅している。

調査区は地下水位が高く、またその層位から、阿尾川の氾濫源であったと考えられ、遺物も二次的な散布を示している。

遺跡の中心は上流の標高の高い地点と考えられよう。



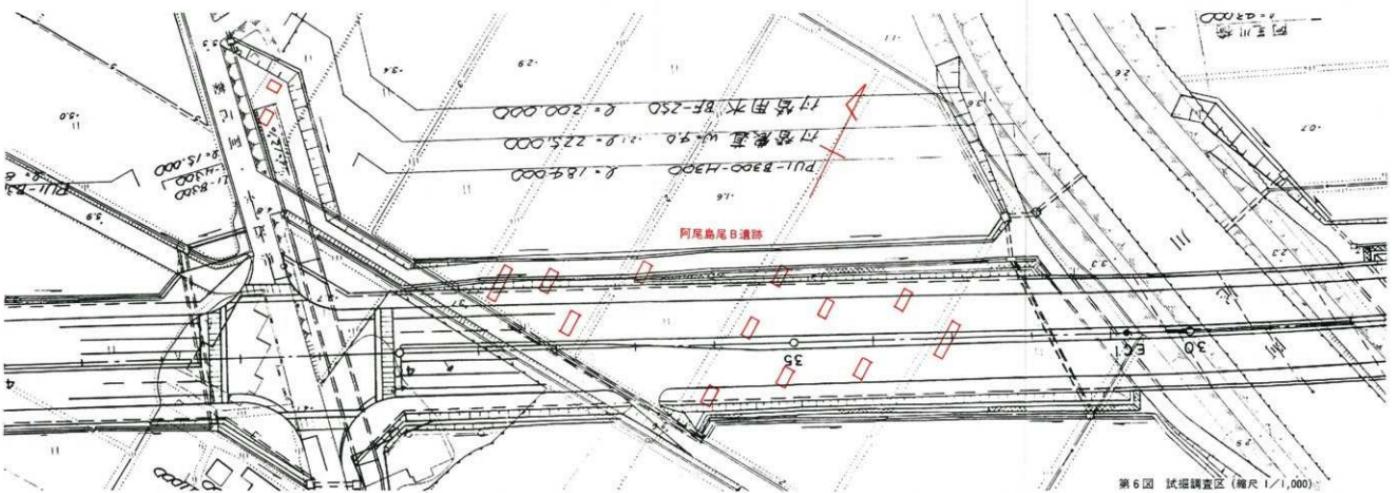
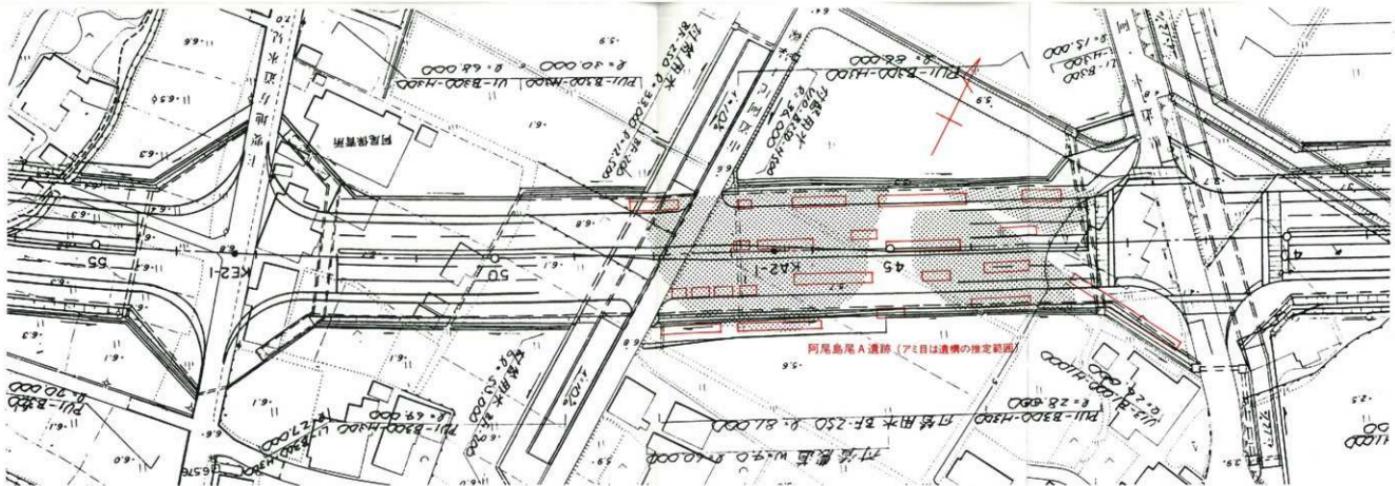
第5図  
阿尾島尾B遺跡層位模式図

## 第5章 まとめ

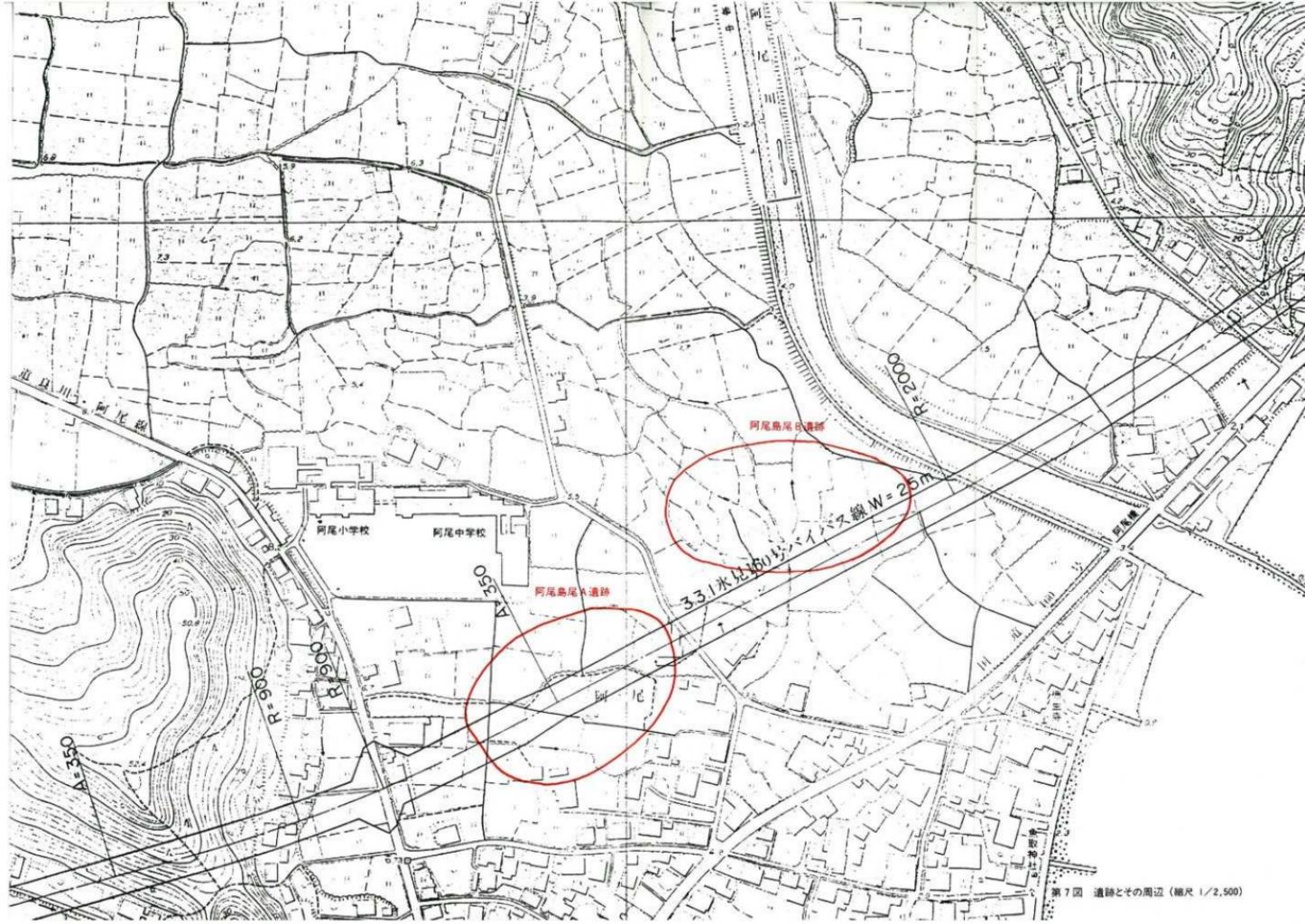
以上の試掘調査の結果をもって、建設省と協議した結果、阿尾島尾A遺跡については、平成2年度に本調査をおこなうこと、阿尾島尾B遺跡については、造構がなく遺物も少ないとから、本調査の対象から外すことになった。

阿尾島尾A遺跡は、今回の試掘調査の結果から、8世紀を中心とした遺跡であると推測できる。氷見市では該期の発掘調査例がなく、本調査の成果が注目されよう。

なお、出土遺物のくわしい観察・検討は、本調査の報告と共におこなう予定である。



第6図 試掘調査区 (縮尺 1/1,000)



第7図 道路とその周辺 (縮尺 1/2,500)

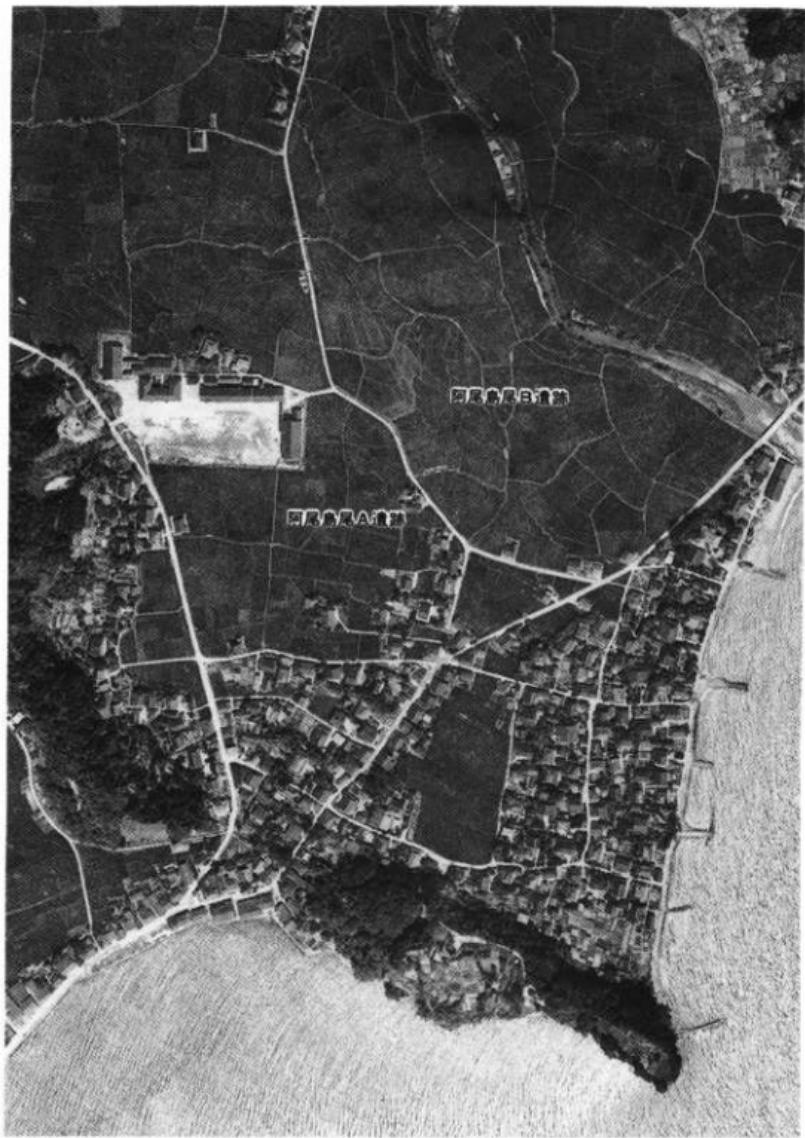


写真1 調査区域航空写真(約1/5,000) 昭和32年撮影

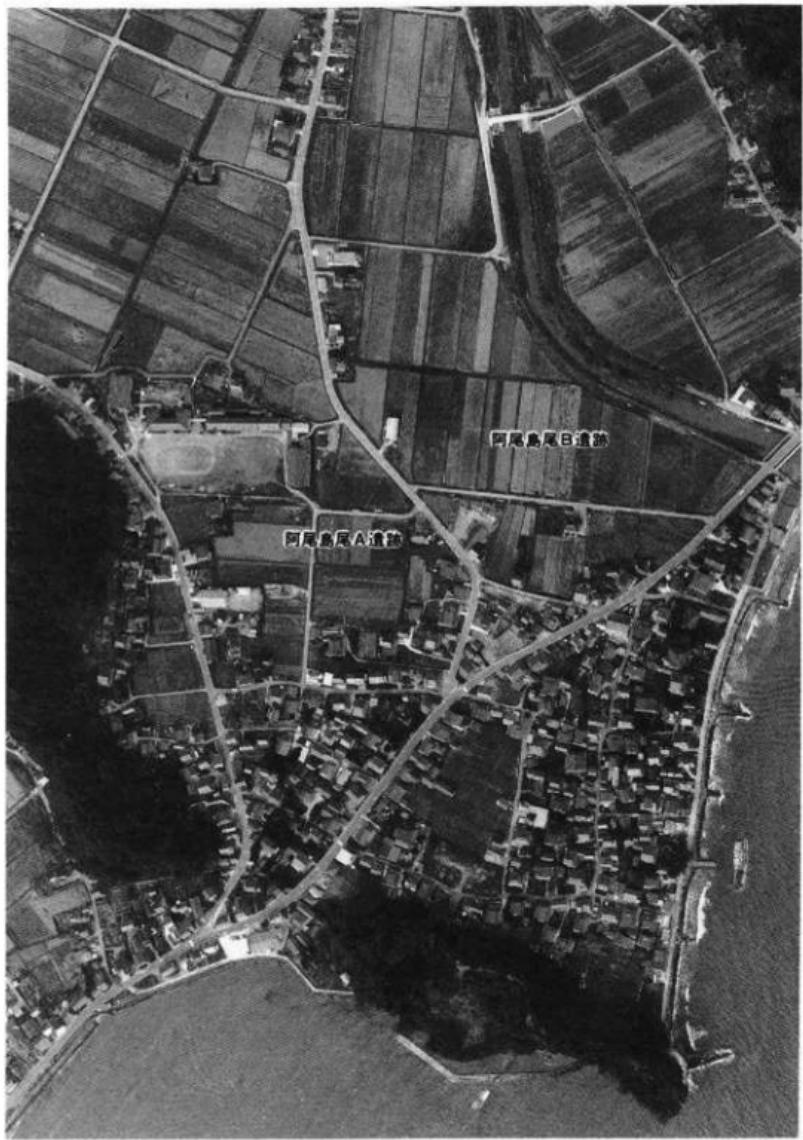
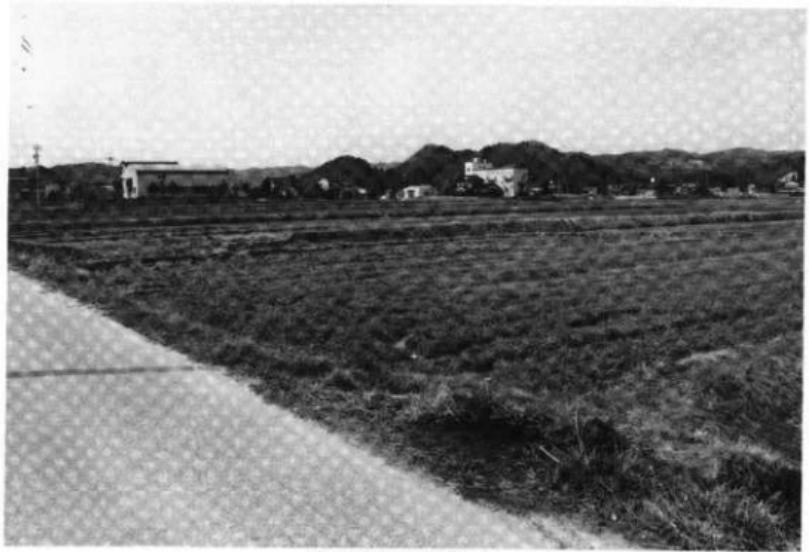


写真2 調査区域航空写真（約1/5,000）昭和56年撮影



阿尾島尾 A 遺跡（西から）



阿尾島尾 B 遺跡（南から）



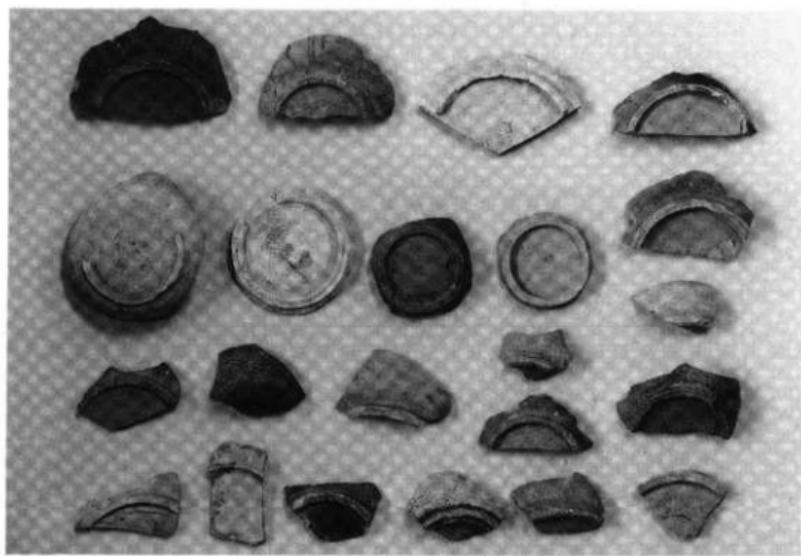
調査風景（阿尾島尾 A 遺跡）



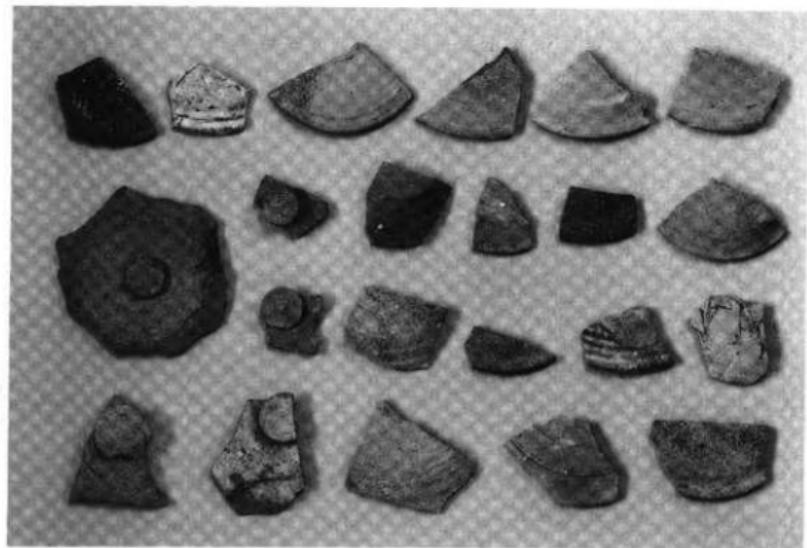
調査風景（阿尾島尾 B 遺跡）



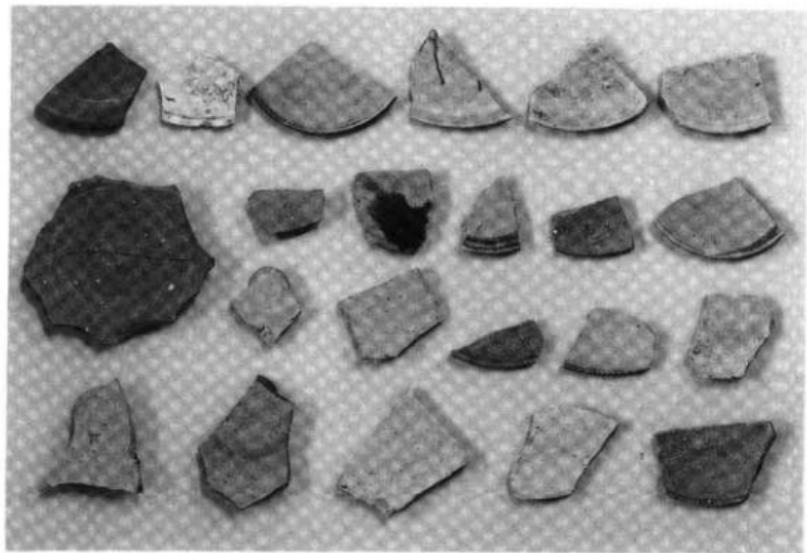
調査風景（阿尾島尾 A 遺跡）



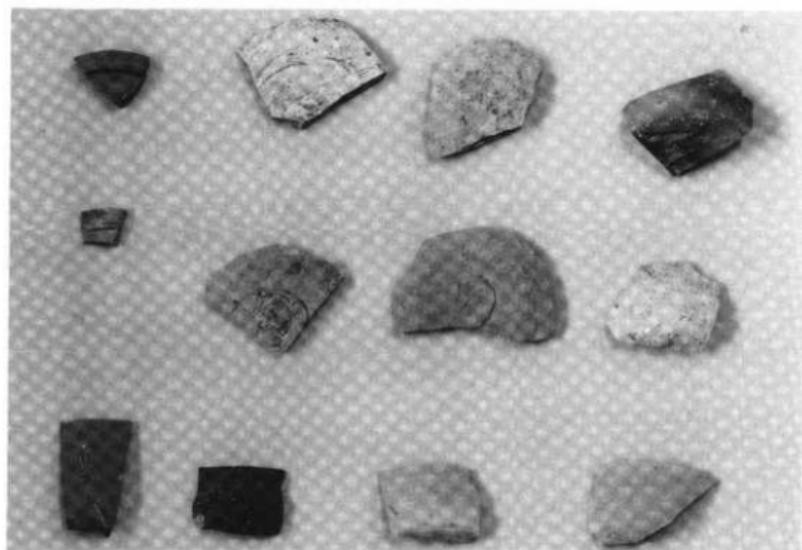
出土遺物 (i) 阿尾島尾 A 遺跡須恵器（杯 B）



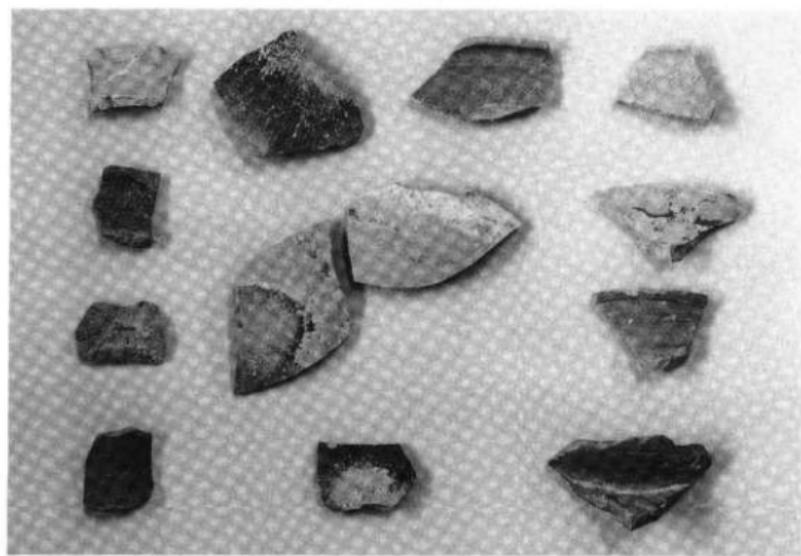
出土遺物 (2) 阿尾島尾 A 遺跡須恵器 (杯 B 盤外面)



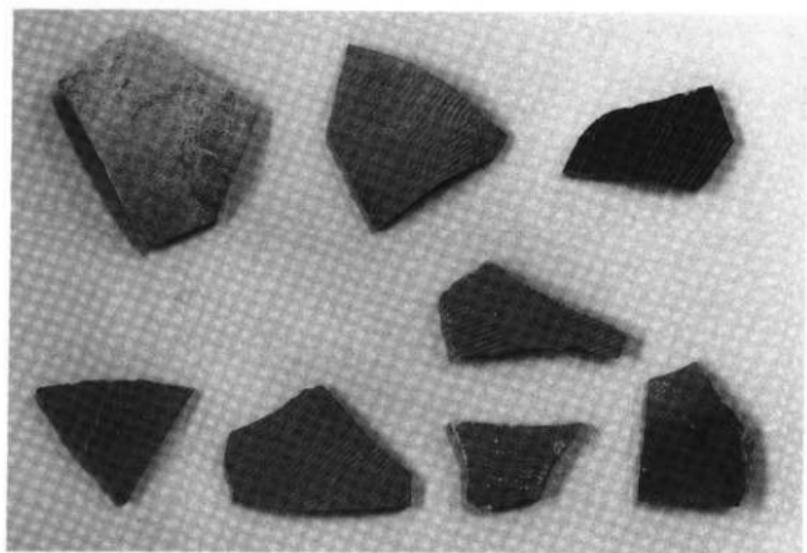
出土遺物 (3) 阿尾島尾 A 遺跡須恵器 (杯 B 盤里面)



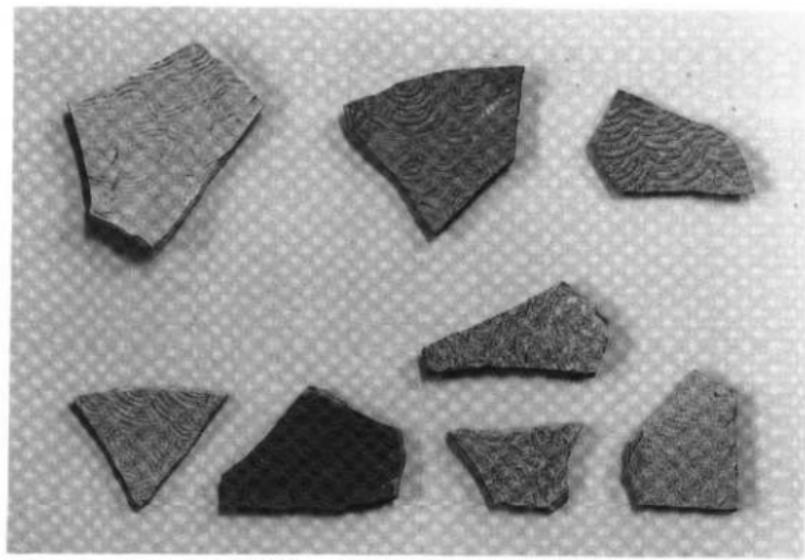
出土遺物(4) 阿尾島尾A遺跡須恵器(杯A蓋、杯A、杯口縁)



出土遺物(5) 阿尾島尾A遺跡須恵器(瓶など)



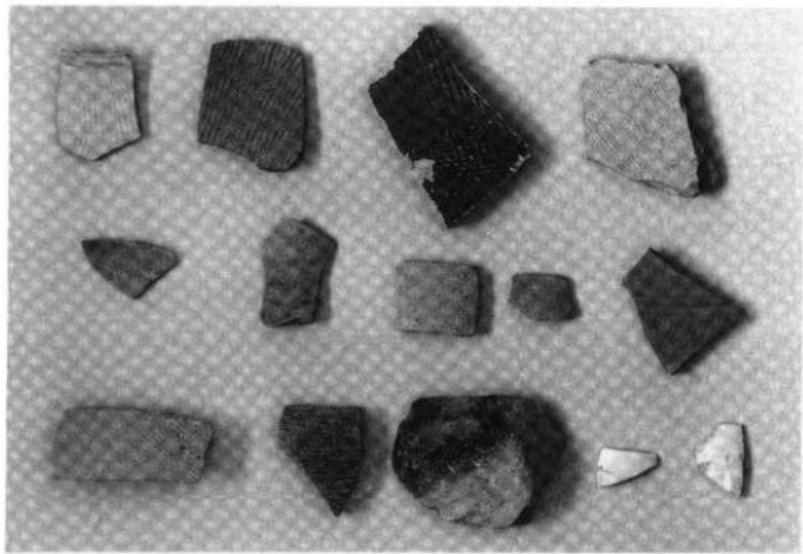
出土遺物(6) 阿尾島尾A遺跡須恵器(壺外面)



出土遺物(7) 阿尾島尾A遺跡須恵器(壺内面)



出土遺物 (8) 阿尾島尾 A 遺跡石器・珠洲・伊万里系磁器・土鍤



出土遺物 (9) 阿尾島尾 B 遺跡繩文土器・須恵器・珠洲・伊万里系磁器

平成2年3月25日 印刷

平成2年3月31日 発行

一般国道160号水見バイパス  
埋蔵文化財試掘調査報告 I

編集・発行 水見市教育委員会  
〒935 富山県水見市本町4-9

☎0766(74)8215

印 刷 株式会社トーザワ